

【国重要文化財指定概要】

- 指定名称 古谿荘 9棟
- 指定年月日 平成17年12月27日
- 指定番号 建第2476号
- 所在地 静岡県富士市岩淵233番地
- 所有者 一般財団法人 野間文化財団

指定内容

建物名称	構造	建築面積
玄関棟	木造、スレート葺	55.89㎡
応接棟	木造、棧瓦葺	453.48㎡
広間棟	木造、鉄板葺	175.43㎡
大広間棟	木造、鉄板葺	251.19㎡
居間棟	木造、スレート葺	207.95㎡
八角堂	木造、スレート葺	128.63㎡
管理棟	木造、棧瓦葺	147.43㎡
内蔵	土蔵造、二階建、棧瓦葺	164.95㎡
板蔵	木造、三階建、棧瓦葺	129.13㎡
建物総面積		1714.08㎡ (約520坪)

附・平面図 2枚 (大正5年、大正8年)
宅地 18,838.74㎡ (約5,760坪)
(門、守衛所、石造橋、石造塙壁を含む)

古谿荘は現在非公開となっています。
所有者への公開申し込みや問い合わせは
ご連絡ください。

【発行・問い合わせ先】

富士市役所文化振興課
〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地
TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789
Email: si-bunka@div.city.fuji.shizuoka.jp

平成27年12月発行



【古谿荘の概要】

日本三代急流のひとつ、富士川の西岸、富士市岩淵(旧庵原郡富士川町)の高台に、明治時代後期に建てられた木造建築があります。

この建物は敷地内の字名のひとつである古谿から「古谿荘(こけいそう)」という名前がつけられましたが、後の所有者の名前から「野間別荘(のまべつそう)」とも呼ばれてきました。

約520坪(1,714㎡)にも及ぶ回廊で結ばれた9棟の建物を中心として、日本庭

園や果樹園を主体とした西洋庭園で構成された敷地は、建設当初、約1万6千坪(52,800㎡)を測ったとも言われています。

明治39年、時の宮内大臣、田中光顕は、富士を仰ぎ伊豆半島を望む風光明媚、気候温暖なこの地に、一種の迎賓館とも思われるほど大規模な別荘の建築に着手します。明治の元勳らしく、絶大な権力と財力で3年の月日をかけて明治42年11月(43年9月の記録もあり)

完成します。格調高い書院造りの大広間を中心に、材料・工法とも木造建築の粋を尽くした中に数寄屋をも加味し、また明治時代特有の新材料、輸入品や西洋工法なども積極的に採り入れ、伝統的和風建築と西洋建築を融合させた近代和風建築の最高峰ともいべき建物を造りあげました。また、古谿荘に電気を通すために、電力事業を計画していた芝富村(現富士宮市芝川)の四日市製紙(現王子エフテッ

クス株式会社)からいち早く送電が開始されました。

田中光顕は、大正3年から7年までこの古谿荘で隠居し、その後、蒲原町(現静岡市清水区蒲原)宝珠荘(現青山荘)に移りました。昭和9年、満州国皇帝・溥儀(ふぎ)に古谿荘献上の話が持ち上がりますが、満州国の方から辞退されたようです。

まもなく昭和11年に、古谿荘は講談社初代社長野間清治に譲られ、吉川英治や川端康成といった文豪や各界の名士がこの古谿荘を訪れ、数々の歴史ロマンが生まれました。現在は一般財団法人野間文化財団により大切に守られています。

平成17年12月に、近代和風建築の最高峰を示す建造物のひとつとして、国の重要文化財(建造物)に指定されました。

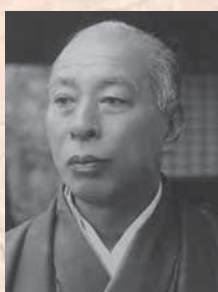
時代を拓いた
自由びとのこころ、芳しく。

古谿荘は誰が設計して、誰が建てたのか全く分かっていません。

また、設計図も残されていません。建築に関する記録がほとんど残っていない中で、田中光顕と親交のあった横山健堂(山口県出身の文学者)の著述によると、「この山荘は建築、その他万事一切、彼一人の設計に基づくものであると聞く。…中略…」彼は自ら称して田中式といふ。」とあるように、設計や建築デザインについては、すべて田中光顕自身が行ったと伝えられており、これを自ら「田中式」と称していました。建物や庭園には従来の様式にとられない独特の発想に基づく設計やデザインが随所に認められます。



左右対称の床の間、富士見の間(鶴亀の間)



田中光顕
(一八四三—一九二九)

天保十四年土佐国(高知県)佐川村に生まれる。武市瑞山に師事後、上佐藩脱藩。高杉晋作とともに幕府征長軍と戦う。中岡慎太郎死後、薩援隊を統率。維新後政府に出任。明治四年、岩倉公使の随員として欧米巡遊。十八年、第一次伊藤内閣で内閣書記官長となり、その後、会計検査院長、警視總監、学習院長を歴任。三十一年、第三次伊藤内閣の時、宮内大臣に就任。四十年には伯爵の爵位を受ける。退官後は、岩淵、蒲原に隠居し、維新烈士の顕彰に余生を捧げ、昭和十四年に九十七歳で逝去。

号 青山



野間清治
(一八七〇—一九三〇)

明治十一年群馬県桐生に生まれる。東京帝国大学文学部大学臨時教員養成所を卒業のち、東京帝国大学法科大学主、廣書院に就任。四十二年大日本雄弁会の看板を掲げ、翌年雑誌『雄弁』を創刊。四十四年講談社を興し、『講談倶楽部』で大衆文芸勃興の先駆をなした。大正十四年には『キング』誌で百万部の夢を果たす。当時わが国における雑誌発行の6〜7割を占めた。書籍でも吉川英治の『宮本武蔵』など多くのベストセラーを世に送り出した。昭和十三年六十一歳で逝去。



かつての芳野庵貯水池



古谿荘
大正5年、8年に描かれた絵図により、建設当時の古谿荘全容を知ることができます。給水・排水方法、電線の埋設等、現代にも通用する進んだ考え方がされていることがわかります。



一葉庵(赤岩離邸)
古谿荘の北西400mほどの谷津沢の上流、八坂神社の南側に一葉庵と呼ばれる離れがありました。ここからは古谿荘の飲料水が引き込まれ、現在は貯水池だけが残っています。



芳野庵(吉津離邸)
古谿荘の北1kmほどに芳野庵がありました。現在は東名高速道路上り線富士川サービスエリアに様変わりしています。かつては3,000tもの大きな貯水池があり、そこからドレイ製の鑄鉄管を使って古谿荘の庭園内に水を流していました。

古図の彼方に、思い馳せて。



国指定重要文化財
古谿荘

永瞬の間に心澄まして
時代のかほりを聞く。

【古谿荘庭園】

庭園は、現存する回遊式日本庭園と、かつては広大な果樹園と温室を有する西洋式庭園からなっていました。各所から眺める富士山、富士川、駿河湾、伊豆半島の借景は特筆すべきものがあります。また、赤松と芝生の組み合わせ、水の流れを主とした考え方、コンクリート造りの滝や橋等、明治以降の新しい造園手法で、西洋庭園の影響を感じさせます。



①伊豆石のアーチ式石橋

アプローチ
大門を入ると玄間へ向かう切通しとなったアプローチが続きます。斜面には赤松や山野草が生い茂り、伊豆石の石橋をくぐる車寄せ付きの正面玄関となります。

古写真の石橋（現在とは異なる形）

中庭

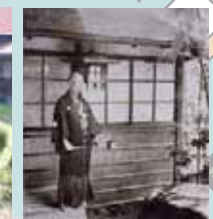
回廊で結ばれた9棟の建物の中庭には、中庭が3か所あります。回廊の中庭は、芳野庵から引かれた庭園用水の湧き出し口でした。



②車寄せと玄間



③広間棟中庭のコンクリート製手水鉢と木製燈籠



明治45年古写真「田中青山山由」より



④白糸の滝（流水再現時）



⑤小川の流れる回遊庭園（流水再現時）

回遊式日本庭園

地形の高低差を活かして、複雑で立体的な園路や緩急のある水の流れを楽しめるよう設計されています。貯水池や送水管の消失により水の流れは現在途絶えています。



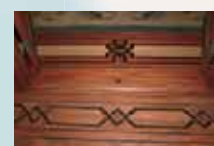
外国人の仰き見て
大和島根の園の困め
と為も宜なら哉、けに
壯觀限りなき古谿荘
の山岳美は此の眺望
に盡く。

聖徳太子 本山白雲
「古谿荘一夜より
（玉環美術）

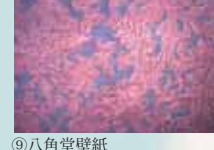
古谿荘案内



⑦大広間より赤松越しに富士を望む



⑧八角堂床
モザイクパーケット



⑨八角堂紙

八角堂

中央に八角形の応接室が設けられ、それをとりまく廊下から四方に4室が設けられています。中央の部屋は、食堂にも利用されていたと言われ、床は寄木張り、壁は輸入品の壁紙が貼られています。窓ガラスもドイツからの輸入品と言われています。中央の部屋の上部には、換気用の無双窓が設けられており、下から操作して開閉できるような工夫がなされています。



⑪玄間から富士見の間に向かう廊下の舟底天井



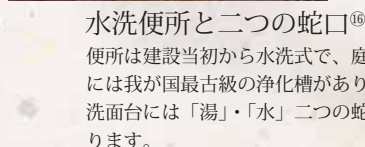
⑫オガラ張りの天井

舟底天井

玄間から途中、南方へ伸びる幅一間の廊下。天井は、竹とオガラの糞張り張りの数寄屋風に施され、円形窓などから自由な感性がうかがえます。

浴室

浴室の糞子は檜の漆塗りで、天井は湯気抜きの換気穴が施され、地下のボイラーで風呂を焚いていました。



水洗便所と二つの蛇口

ドイツ製分電盤

古谿荘は当時の富士川町における電灯の第一号でした。照明器具はギヤマンでできています。



⑬各部屋とつながる呼び鈴盤

大広間

6間×2.5間の上座の間と、これを取り囲む幅2間の広縁（御縁座敷、延72畳）からなっており、100畳敷の大広間とも呼ばれています。上座の中央には袋櫛と、その左右には付け書院のある6畳の床が配されて左右対称の形式をとっています。屋根を支える小屋組みを西洋建築技術の洋小屋組（キングポストラス）とすることで、細い柱や長押ながら広々とした大空間を創出してます。最も格の高い部屋に相応しく、柱は檜の四方柱、長押・敷鴨居は檜の一本もので最長36尺（10.9m）、袋櫛周りはずべてけやき板など、最高級材がふんだんに使われています。



⑭大広間の蔭の葉模様の組子欄間

応接間

下岡田和条約で伊藤博文と李鴻章が談判した際に使用されたといわれている椅子とテーブル。



⑮木村久 撮影

間宿・岩淵の地に
呼吸つづける歴史のロマン。

凡そ天下に絶景多しと雖も古谿荘の如きは稀也。人工の美と自然の美景と相俟つて、情景を繰らせらるる、秋意を凝らせらるる、飽き伯の趣味好尚の上に清酒堅齋に造られ、殊に其地の自然の大観を念にすに、即ち先づ日本風の大広間より富士川を隔てて芙蓉峰の雄姿を仰ぐべく、紫雲横さまに柳曳く上に玲瓏として白眉倒に懸ら大等に至りては詩人も正に筆を抛つべし。

⑯木村久 撮影